



日本カトリック海外宣教者を支援する会

巻頭言

時流に逆らう司祭とともに

ブラジル サンパウロ 岡村 淳
(記録映像作家)

「オカムラさんは、ブラジルに行って何年になりますか？」よくあるこんな質問に、いつもうろたえている。

私が初めてブラジルを訪ねたのは、1983年。日本で大学を出て、テレビのドキュメンタリー番組を制作する『日本映像記録センター』に入社して2年めのことだ。世界各地の少数民族や野生動物を紹介する番組『すばらしい世界旅行』制作班に配属されて、〔大アマゾン〕シリーズの取材のために派遣されたのだ。

このシリーズは視聴率が高く、私は毎年、南米諸国に送られることとなった。そして、ひと言でいえば南米の持つ多様性に惹かれて、いっぽう日本のテレビの都合に合わせて取材を続けることに限界を感じて、会社を辞める決意をした。特に当てもないままブラジルへ、いちフリーランスとして移住したのが1987年。そのどちらの年から私のブラジル歴を数えるべきか、質問の意図をよく吟味しなければならないのだ。

しかしわがアミーゴ・佐々木神父のブラジル歴が何年になるかは、即答できる。佐々木神父は私の生まれた1958年にブラジルへ渡航したので、常に私の歳が佐々木神父の移住年数にな

♡♡ もくじ ♡♡

巻頭言	1
第64回運営委員会議事録	3
宣教者からのお便り	4
帰国した宣教者からのお便り	11
こんにちは! お久しぶりです!!	14
ザ メッセージ	14
ECHO	15
新入会員・事務局より	16



るからだ。

私はブラジルで結婚する際に、カトリックの洗礼を受けた。その準備の公教要理を日本語で授けてくれたのが、佐々木神父の実姉、当時サンパウロで奉仕していたシスターマルタ佐々木だった。私の受洗理由は、ひんしゆくを買いそうだ。あこがれだったジャーナリストの本多勝一さんは、イスラム世界の取材に際して、自らムスリムの洗礼を受けていた。私が世界最大のカトリック人口を擁するブラジルで取材を続けるには、本多さんの覚悟にならってカトリックの洗礼を受けてみようと思ったのだ。

私はシスターマルタの紹介で、佐々木神父を訪ねてみた。佐々木神父はブラジル南部のパラナ州の奥地で、「フマニタス」という慈善協会を立ち上げていた。山峡に隠れ住んでいたハンセン病患者たちのお世話に始まったフマニタスは、皮膚病のクリニックを運営して、さらに土地なし農民といわれる人たちや、ストリートチルドレンなどの支援にも活動を拡げていた。佐々木神父は修道会にもブラジルの教区にも属さず、権威臭さや教条主義とは真逆の人だった。司祭とテンプラ信徒（衣だけ）という関係を離れて、そして親子ほども歳の離れた佐々木神父からアミーゴ（友人）と呼ばれる間柄となった。

その友情の産物が、フマニタスの創立 25 周年を記念して制作した記録映画『赤い大地の仲間たち フマニタス 25 年の歩み』だ。初版の制作は 2002 年だが、日本ではカトリック信者以外からの支持を多くいただき、今日でも上映活動を続けている。

佐々木神父は今年 87 歳になった。フマニタスの今後をめぐって紆余曲折があったが、「神の摂理によるアシジの聖フランシスコ修道会」という名前は長いが歴史は短い修道会に運営を譲ることになった。今年 1 月、この修道会を歓迎する記念のミサが現地で行なわれ、私は友情撮影のために駆けつけた。2 時間におよぶミサをそっくり撮影して編集して、DVD に焼いて佐々木神父にお送りした。気の短い佐々木神父はこの映像を見ることもないかもしれないと思っていたが、意外な連絡をいただいた。

佐々木神父は写し取られたミサの時の自分の姿を、ファリザイ人のように思ったという。自分は本当にハンセン病の人たちや、貧しい人たちを愛して活動してきたのかと、心に種々の疑問が起こってくる、と。

いまなお、こうした証しを伝えるブラジルに渡ったキリスト者と交わることでできた感動を、日本の方々にお伝えしたい。



□■□ 第 64 回運営委員会議事録 □■□

日 時：2017 年 3 月 16 日（土） 15:00~16:30

場 所：ヨゼフ修道院 2 階会議室

議 事

I. 「きずな」138 号について

全体に記事が少なくなって来ている。学校関係からの投稿も減少している。また、東ティモールとカンボジアの記事は長文なので、1 つの話題にしぼって掲載。

II. 「きずな」139 号について

巻頭言は、ブラジルの佐々木神父様のドキュメンタリー映画を制作された、岡村淳監督にお願いすることになった。

III. 援助申請の審議

- 1) コンゴ民主共和国 Sr. 佐野浩子（マリアの宣教師フランシスコ修道会）より申請：ルブンバシ郊外の農場 kilobelbe で農業推進と栄養不良の子供と村民援助のため、大豆、ひまわりの油を絞るための機械購入費用 \$5,000（583,900 円）
- 2) アルゼンチン 北島泰治神父（神言修道会）より申請：ミシオネスからエルドラド、パラグアイのピラポ、ラパツの教会までの宣教司牧のための交通費と車の維持費。送金に困難があるので、2017 年～20 年までの 3 年分 \$3,000（345,600 円）
- 3) ボリビア 倉橋輝信神父（サレジオ会）より申請：サンタクルスの移住地、日系人信徒司牧のためのガソリン代、運転手日当など \$950、アルゼンチン、ブエノスアイレス日本人共同体司牧のための旅費 \$475、合計 \$1,425（164,160 円）
- 4) カンボジアに派遣の井出司さん（JLLM 信徒宣教師会）より申請：教会の建物の土台補修費（材料と工賃）\$970 及び建物にソーラーパネルを設置する費用 \$805 合計 \$1,775（206,492 円）

1)～4)について審議の結果 すべて援助決定。

なお、2)の北島泰治神父と 3) 倉橋神父（帰国中）の援助金は、一時帰国されるため、手渡しすることとした。

IV. その他

- 1) 2017 年度の「宣教師のお話を聞く会」について

候補を絞ってお願いする。時期は 9 月ごろを予定し、場所は四谷のニコラバレを第一希望としてさっそく会場を予約する。

- 2) 「きずな」発送について

*国内便は 3 月 2 日（木）にシスターを含む 12 名のボランティアで、2,965 通発送した。

*発送ボランティアの平均年齢が 70 代後半になり作業が大変になってきている。前号のボランティア募集で応募された 3 人の方が参加されたほか、エスコラピオスのノビス 2 名も手伝ってくださることになった。感謝。

*海外便と大口便は、3 月 7 日（火）にボランティア 3 名を含む 4 名で海外 150 通、大

口 25 通発送した。

3) カレンダー発送について

1 月 13 日 (金) に、4 名のボランティアで事務所から 53 通を発送した。

4) 年会費と寄付の領収書作成について

ボランティアが 1 名加わり、2 名体制となった。入金者 213 名 新加入 27 名 匿名 6 名
計 246 名に領収書を発行している。

5) 切手の寄付について

未使用の切手・はがきの寄付が少なくなっている。今後も積極的に声かけをしたい。

*次回運営委員会日時 6 月 17 日 (土) 15 時



宣教者からのお便り



南スーダン共和国

◆ジュバ◆

緊急援助のお願い !!

イエスのカリタス修道女会 下 崎 優 子

昨年 5 月に南スーダンに戻りました。間もなくの 7 月、5 回目の独立記念日を前に政府の分裂が起こり、戦いが始まりました。2013 年に続き 2 回目の少し大きな争いでした。

私たちカリタス会はサレジオ会とサレジオンシスターの会と、同じ敷地内で、幼稚園、小学校、高校、技術学校、診療所をしています。2013 年のクーデターのときは、ここでは、直接戦いはありませんでした。今回は、直接私たちの敷地内で、数十名の兵士たちが流れ込んできて、1 時間半にわたる銃撃戦となりました。夜でしたから、私たちは既に家の中にいましたが、戦闘が終わるのをじっと、本当に、このときは死を覚悟しました。しかし、ロザリオを手に、私たちを守ってくださるよう祈りました。神様とマリア様は助けてくださいました。1 人も死

なず、無事でした。この時すでに、私たちの敷地内にはたくさんの村人が、学校の校舎に避難して来ていましたが、彼らも無事でした。

次の朝、さらにたくさんの村人が、私たちのもとへ逃げて来ました。ほとんどが流れ弾に当たり、けがをしていました。まず、彼らの治療と水、食糧のため走り回りました。政府の軍の戦闘だったため、政府と軍人のためだけに食糧がありました。こちらではクーデターからずっと食糧不足があり、国連の WFP の食糧倉庫はすべて、兵士たちによって奪われました。その上、ほとんどの国連職員、NGO は、すぐさま国外退避したため、市場に残ったものを買うしかありませんでしたが、急激に値段が吊り上げられました。食糧を売っているのはウガンダ、ケニア、アラブの人たちで、高値で売って、国外脱出しようと準備していたからです。しかし、いくら高くとも買わなければ食糧がありません。今回の戦闘も急に起きたため、サレジオ会もサレジオンシスター、それに私たちも十分な現金がありませんでしたが、買えるだけの食

糧を買いましたが、すぐに底をついてしまいました。

今も不安定な情勢が続いています。私たちも7月末から8月末まで、ウガンダに一時避難していました。2013年のクーデターの時は、避難しませんでした。私たちの教会がある村で、レイブ事件が発生しはじめ、主任神父からの強いすすめで、国外退避しました。ウガンダ国境の最大避難キャンプの近くの、地元の修道会にお世話になりました。しかし、この場所に辿り着くために、数か所、全く未知のウガンダの国を転々としなければならませんでした。国外避難する大変さを体験しました。それでも私たちは修道会を探せば、何とかありますが、南スーダンの避難民は行く当てもなく、さ迷いやっと難民キャンプにたどり着き、力尽きて亡くなる人も多いと聞きます。実際私たちは、難民キャンプを何度か訪問し、その現状を目の当たりにしました。

政府側と反政府側は、戦いを始めようと不穏な動きがあります。2013年のクーデターはクリスマスのホリデイを狙って起きたので、今年のクリスマス前には、皆、警戒していましたが、毎日どこからか銃声が聞こえていました。南スーダンの至るところに、政府軍、反政府軍が拠点作りのために、村人が追い出され、ウガンダとの国境にある難民キャンプには、毎日、南スーダンからの避難民が押し寄せています。教会は彼らのために司牧を始めていて、私たちの支部も、難民キャンプの近くのカリタスの家を借りて、司牧に当たっています。

私たちのグンボの教会の敷地内は、2013年と今回の戦いで逃れて来た国内難民の2つのグ

ループがいて、いま4,000人ほどがいます。グンボ村は親戚を頼って一緒に住んでいる人を合わせると、もっと多くの難民がいます。最大の問題は食糧の不足です。教会の敷地内の難民は登録されると、国連からの食糧配布を受けられますが、十分ではありません。4,000人に対し、支給されるのはたったの300人分だけ。それでも、彼らは無料配布を受けることができます。問題は村人です。彼らは親戚が増えて食糧調達が困難にも関わらず、食糧配布を受けること出来ません。今年に入って急激に経済が落ち込み、異常なほどに物価高になっています。ただでさえ、現金収入の少ない国民は、食糧不足で亡くなり、家族を養うことのできない父親たちは自殺をしています。

政府は公務にあたる兵士や警察、学校の先生に何か月も給料を支払えず、泥棒が蔓延しています。夜だけでなく、日中でもどうどうと盗んで行きます。先日、町で買い物を終え村の道に入ったとたん、数人の女性たちが大声で叫び走り出しました。車を止めどうしたのかと聞くと、泥棒が家のものを盗み、逃げた。それが教会の方向だと言うので、その女性たちを車に乗せて追いかけました。しかし、泥棒は教会の方向へ真っ直ぐでなく、茂みにはいって行き、車では行けないので女性たちはおりて追いかけました。が、捕まえることはできませんでした。今は、泥棒イコール兵士なので、銃を持っているため捕まえることは不可能です。この日の泥棒は兵士ではなかったので、彼女は追いかけましたが、あとは泣き寝入りするしかない状態です。

国連はいろいろ対策を重ねていますが、大統領はじめ軍は彼らを嫌い、この国がよくならな

いのは国連のせいだと、彼らを敵対しはじめ、国民にもそれを煽りたて始めています。国民の不安は大きくなるばかりで、10月には健康状態が良くない大統領が死んだとの噂が一時流れて国民がパニックになりました。ラジオで噂を信じないように放送しましたが、混乱は収まらず、大統領は街をパレードして、私は死んでないと自ら姿を見せ、混乱は落ち着きました。

いつも皆さまに寛大な支援をしていただいています、今回もお願いしたのです。12月から乾季が始まります。7月からの内戦は雨季でしたから、食糧不足でも、空いた場所を耕し、自然の草を食べる事が出来ました。しかしこれから10か月は砂漠状態になります。私たちは毎日、早く雨季が来るよう祈っています。雨が降り始めると、草が生え畑ができ、自給自足できるようになるからです。何の恩返しもできない貧しい私たちですが、南スーダンの空の下から、毎月初金曜日に皆で、支援してくださっている皆さまのためのミサを捧げています。生きて帰れましたら、また報告に伺わせていただきます。神様が私たちを生かし、南スーダンの人々に寄り添える宣教師となりますように、どうぞお祈りください。

申請書

申請国・アフリカ 南スーダン共和国

申請内容・食糧支援

申請金額・50万円

申請者・イエスのカリタス修道会 下崎優子

*日本のお米にあたる主食のとうもろこしの粉
10kg（一家族5日分）を500袋

現在、一袋日本円で約1,000円です。

*これは、あくまでも希望です。他の宣教地に

も支援しなければならないと思いますので、支援していただける金額はいくらでもかまいません。今、南スーダンはいくら支援しても、あとをたたない食糧不足ですから。とにかく、お年寄り、病人、小さい子どもたちから、配布しています。

この緊急援助に応えるため、急きょネット上で運営委員会を開き、50万円の支援を決定し送金しました。

カンボジア ◆シェムリアップ◆

クメール正月と復活祭が重なって

ショファイユの幼きイエズス修道会 谷村・樫野・黒岩

今年の復活祭4月16日は、珍しくクメール正月（4月14日～16日）の時期と重なりました。カンボジアに来て15年目を迎えて初めてのことです。特にカンボジアのカトリック信徒にとっては「新しい命の始まり」としてより大きな喜びを感じていることでしょう。

さて、プレスクールでは今年もお正月行事のひとつとして、子どもたちが「ご両親への御礼」



の式を行い、日頃の感謝に添えて小さな花束を捧げました。

またシエムリアップ教会では、復活祭に大人10人と、赤ちゃん・幼児5人の洗礼式が行われました。新しく設置されたばかりの洗礼の池において、洗礼の水を浴び、さらに頭までの全身を水に沈めての受洗式でした。

カンボジア ◆プノンペン◆

今秋幼稚園の園舎が完成します

シヨファイユの幼きイエズス修道会 橋 本 進 子

今年のカンボジアは、4月13、14、15日の3日間がお正月です。学校等は2週間お休みです。カンボジアの皆さんは遠くから、近くから家族が集まり、再会とおしゃべり、ピクニックを楽しんでいます。今年のクメール正月は聖週間と重なり、私たち奉献者は教会行事の準備と、聖なる日々の典礼に与るために忙しさと祈りのはざままで、文字通り小さな十字架を担っています。

ご復活には多くの新しい信仰家族の皆さんが誕生しました。プノンペン教区では入信式当日、100余名の受洗志願者が、オリヴィエ司教様の祝福を受けました。復活祭当日、所属教会で洗礼の恵みを受けます。カンポット教区では19名の男女が受洗の恵みをいただきました。私たちがカンボジア入りをした10余年前には、受洗者のほとんどが若い青年男女でしたが、近年は大人、年配の方々の仲間入りが増えています。

うれしいお知らせがあります。2008年以来この方、カンポットカトリック文化センターの英語教室兼保育室で幼稚園教育を行なっていま

す。当初から幼稚園専用の保育室が欲しいと保護者と関係者ともども強く、強く希望していました。その夢と希望の園舎が、本当に多くの皆さんの援助をいただいて建築中です。昨年12月下旬に工事が始まり、2017年9月か10月に完成の予定です。モンテソッリー教育法による保育の3教室を主軸に、敷地の関係で2階建ての幼稚園園舎になります。教育環境整備のためにまだまだ問題は山積していますが、本当にうれしくまずはほっとしています。

お礼が後になりましたが、今年もガソリン代、図書館関係費にご援助をいただいております。いつも私たちの使徒職を温かく、力強く支えてくださりありがとうございます。お祈りとご援助に心から感謝申し上げます。

カンボジア ◆コンボンルアン◆

担当司祭が変わりました

JLMM（信徒宣教会）井 手 司

コンボンルアン水上村を今まで2年間担当されていた、キョンヨン神父様（イエズス会）が1年間のサバティカルのため韓国に戻られました。2年間という短い期間でしたが、一緒に活動出来てよい経験ができました。当初は神父様と衝突する事が多くありました。神父様は水上村の担当になるまで、カンボジアで10年以上活動されてきましたが、この水上村が他のカンボジアの教会と環境が全く異なるため、戸惑うことが多くあったみたいで、神父様と信徒の方々との間にトラブルが生じました。そのため私も神父様との関係がうまくいかないことがあ



キョンヨン神父様（中央）と水上村の子ども達

りました。神父様がどのように考え、どのような事を行いたいのか、私は理解できていませんでした。また、どのようにコミュニケーションを取ったらよいのか分からない日が続きましたが、神父様と行動を共にすることで、少しずつですが神父様との会話が増えていきました。会話が増えてくると、神父様の考えや思いが少しずつ理解でき、私の考えや思いを神父様に伝える事ができていきました。そして、水上村のこと、カンボジアのこと、神父様のこと、私自身のことも話せるようになってきました。

神父様から、韓国に1年間帰ると聞いた時はショックでした。神父様がサバティカル終了後に、またカンボジアに戻って来て一緒に活動できるように祈り続けたいです。

神父様からよく言われていたことに、「祈り、黙想を大切にすること」があります。日々の生活において、忙しい時や疲れている時等、神様と自分自身と向き合うことができていない時は、毎日必ず祈りと黙想を行ないなさいと言われていました。少しの時間でも毎日祈りを行う事で、神様や自分自身と向き合う事ができると言われました。また神父様は私に、「祈りは一人で行なうだけでなく他の人と一緒に祈りを行なう事も大切」と言ってくれました。そのため、毎週月曜日の夜にバットンバン教会で行われて

いる神父様がたの交流会に、一緒に何度か参加しました。内容は、夕方6時からのミサ、ミサ後の食事、夕の祈りを一緒に行ないます。参加される人数は、毎回5～6人ですが、バットンバン教区内で活動されているキケ司教様や神父様方と交流し、とてもよい時間を過ごすことができました。当初は緊張しましたが、神父様方から多くの話を聞け、一緒に祈りをする事で私も心身ともに安らぐことができました。

私が任期延長で迷っている時も、神父様から「司と一緒に今度もカンボジアで活動していきたい」と言ってくれた時は、私はうれしく思い、任期延長を決断する一つの要因となりました。現在は、同じイエズス会でインド人のラジェット神父様が水上村を担当されています。ラジェット神父様とも良い関係を築いていきたいと思います。

東ティモール

◆ロスパロス◆

急な一時帰国と就労ビザ申請

JLMM（信徒宣教会）深 堀 夢 衣

2016年12月、東ティモールの内務省へビザの延長申請をしていたパスポートを取りに行くと、自分の名前が貼りだされていました。長年ティモールに滞在していると“やばい”雰囲気がわかるもので、心臓の音が異常に大きく聞こえて、ドクンという音と同時に体がピクッと動きます。

貼りだされた紙には「インタビューを行なうのでオフィスに来るように」と。しかし担当官はまだ来ていなくて、1時間ほど待たされまし

た。インタビューでは、NGOの説明からしなくてはならず、3時間ほどかかりましたが、観光ビザをこれまで延長しなくてはならなかった理由を説明しても理解してもらえず、今後は就労ビザでのみティモールに滞在できるとの事でした。貼りだされた他の中国人やインド人は賄賂を渡して早々に帰っていましたが、賄賂を渡すくらいならティモールにいたくないなあと思ってしまいました。

どれだけこれまでティモールを思いながら事業を行ってきたか説明しても、そんなの関係ないね！と言わんばかりの対応でした。ロスパロスの人に日本に帰ることを伝えると、たくさんの人が涙を流してくれました。スタッフは「こんな国でごめんね」と謝ってきました。

日本滞在中は、就労ビザ取得に必要な数々の書類を準備。健康診断書や卒業証明書、犯罪経歴証明書等たくさんの書類が必要に。JLMM(日本カトリック信徒宣教者会)やAFMET(東ティモール医療友の会)の会議に出て現状を報告し、話し合いました。私の後任がいない今、団体の将来についても考える時期にきています。つらいのは、自分の将来についても不安でいっぱいのなか、団体の将来についても考えなければならないことでした。あまりにも荷が重く、すべてが嫌になってしまいました。どうして自分は東ティモールに行ったのだろう？そもそも外国で働きたいと思ったのはどうしてだっけ？と、ティモールに滞在していた時間まで不確かになり、ティモールで何をしてきたんだろう？あれ、もしかして20代全部無駄にした？と思い悩む時間が続きました。あんなにワクワクしていた気持ちも、やる気も、楽しさも、全部どこへ？

もう辞めてしまおうと思ったけれど、思い出すのはティモール人の顔ばかりでした。今の事業で関わっている子どもたち、栄養失調のフィデリアちゃん、魚釣りに一緒に行ったおじちゃんやおばちゃん、スタッフのみんな、待っていてくれる人たち！

私が日本に滞在している間、私の大好きな人がティモールで息を引き取りました。アルジラさんです。彼女は交通事故で娘さんを二人亡くしており、その後、一人の女の子を養子にもらい、旦那さん、5人の子どもと孫1人と生活していました。アルジラさんは魚釣りの名人で、イララル湖に行くときは必ず一緒に行きました。タバコも吸うしお酒も飲む、まさに漁師！という感じの女性でした。初めて会ったときは、なんだ？このガラガラ声のおばちゃんはと思っていたのですが、非常に愛のある人で、近所で困っている人がいると家に呼び、一緒にご飯を食べて、部屋も貸してあげる人でした。私も何度かお世話になったことがありました。そんなとき、おばちゃんは必ず言っていました。「ありがたうは無しよ！その代わり、私が困っているときは助けてよ！がハハ！」と。

3月23日の深夜、息を引き取ったと連絡がありました。周りで泣く子どもたちの声も電話



一番手前で釣りをしているアルジラさん真剣です

口から聞こえてきました。そういえば、日本に帰る前に会いに行けなかったなァー。帰りはバタバタだったもんナァー。とても悲しかったです。また、子どもたちが悲しいときに一緒にいられないこともつらかったです。

ブラジル ◆サンパウロ◆

今年は宣教 50 周年を迎えます

イエスのカリタス修道女会 ブラジル準管区 姉妹一同

その後いかがお過ごしでしょうか？先日、日本の素晴らしいカレンダーをお送りくださり、続いてまた、「カトリック生活」と「こころの灯」をいただきました。皆様方の宣教者への切なるお祈りと、励ましをいただき心から感謝しております。

日本は寒さが長く続いたようですが、こちらは、暑い夏ですが、朝夕は涼しさを感じるようになりました。私どものカリタス会は、今年ブラジル宣教 50 周年を迎えます。大切な召命を送り育ててくださっている家庭訪問に、力を注いでいるこの頃です。これからも、どうぞよろしくお願い申し上げます。感謝を込めて

ペルー ◆リマ◆

慈愛あふれる日系人最初の司祭

信徒宣教者 大 橋 美智子

マヌエル加藤師との初めての出会いは、今から 35 年前にさかのぼります。私は日本人信徒宣教者として、スカボロ会のシュルツ師と一緒に

にペルーに来ましたが、コミテサンフランシスコ会で紹介していただいたのが最初でした。

私たちの宣教地であるカラバイヨ地区は、首都リマから 30 km 離れた貧窮地で、水道や配電設備もほとんどありませんでした。当時はテロが頻発し、戒厳令がしかれていました。インフレによる食料や物資不足で治安も悪い中、雨の降らないほこりだらけの環境で、人々はその日暮らし。ですから、月一度のリマでのコミテの集会に出かけ、加藤師の日本語のミサにあずかれるのは大きな喜びでした。

そのころ、こちらでは日本からの修道女が 5 人活動されていて、お互いに訪問し、友好と特に霊的に支えあっていました。1986 年に、シュルツ師が急逝され、私も一時帰国。その後、日本で教会や多くの友人、ペルーの加藤師やコミテの友人の支えを得て、再びペルー・カラバイヨで活動を続けました。

次第に日系人の方々との関りが多くなりました。そして加藤師と修道女の呼びかけで、リマ日本校の同窓生によるミサ聖歌隊が結成され、日本語とスペイン語の讃美歌を 25 年間、一緒に歌い続けました。そんな中で、師と話す機会も増え、師の生い立ちや宣教活動の苦労談など、分かち合ってくださいました。実際にいろんな

所を案内して人々との出会いを広げていかれ、共に祈る師の宣教の在り方に間近に接する恵みをいただきました。

1926 年リマに生まれ、中学を終えたこ



ろの師の夢は、医師になることでした。一方、教会青年クラブ講話会に参加しているうちに、神父になりたい気持ちにもなりました。その当時、日系人の教会も司祭もいなくて、ミサはすべてペルー人の司祭によるものでした。また、病院などで言葉のわからない人のためにお世話をするのは、日本語のわかるフランス人の修道女でした。

医師になる夢を持つマヌエル加藤への、修道女たちの強い祈りが届き、次第に神父への道がしかれました。1954年、司祭になりローマで修学の予定でしたが、当時の政権は外国渡航は許可しても、ペルーに戻ることは許さなかったもので、日本へ行かれました。1978年に帰国し、本格的にペルーの貧しく困っている人々のために働くことを決意。日系一世の有志とともに、祈りのうちに活動が始まりました。リマから離れた北区の貧窮地で、何もない砂漠の土地1万hmを政府から譲り受けました。まず、養護施設が建ち日系人修道女のいる修道会と協力して、50名の児童の世話と教育が始まりました。その後福祉事業となり、近隣の青少年のための技術訓練校、小聖堂付き黙想の家ができました。2002年には「エンマヌエルクリニック」ができ、今日まで多くの人々が利用し、地域の住民に感謝されています。最後にできたのが、日系人のための「老人憩いの家」です。これは加藤師の

不撓不屈の献身と、宗教を超えた多くの日本人からの寛大な心と援助の賜物であるといえます。

数年前、秋篠宮ご夫妻のペルー訪問の折、「憩いの家」の入所者を慰問されました。その時「加藤師のホビーは何ですか」と聞かれ、即座に「貧しい人のために働くのがホビーです」と答えられました。

日系人最初の司祭としての62年間の奉獻生活は、日系人カトリック教会の歩みであり、信仰の道であると思います。これからは一層のペルー日系人の結束を促し、ペルー社会での兄弟姉妹として、交わりを深めていかねばならないと感じています。

マヌエル 加藤神父様のご帰天

横浜教区 大和教会

ラテンアメリカコミュニティ同

加藤神父様との交流は、1997年日本にいるペルー人たちが、チャリティコンサートやバザーで得た収益金を、母国の貧しい人たちのために、リマの加藤神父様にお届けしたのが始まりでした。神父様は大変喜んでくださり、日本にいらっしやると、大和教会を訪ねてくださり、ペルーをはじめ南米から来ている人たちを、慰め励ましてくださいました。

この度のご帰天の報は、本当に悲しいことでした。温かく穏やかだった Padre Kato のお人柄を偲び、2月5日にご親交のあったアンヘル山野内神父様（浜松教会）の司式により、スペイン語のミサで加藤神父様の追悼のお祈りをお捧げしました。

帰国した宣教者からのお便り

私のミッションの地、セネガル

マリアの宣教者フランシスコ修道会 玉 木 照 子

私はこの度、セネガルでのミッションを終えて日本に帰国いたしました。その間、たくさんの方々の祈りと援助に支えられて、ここまで来られましたことを心から感謝しております。

アフリカ大陸西端海岸のセネガル国は、1960年にフランスから独立し、イスラム教徒85パー

セント、カトリック教徒5パーセント、公用語はフランス語、国土は日本の2分の1の小さい国です。私はここに派遣されて以来、首都のダカールにある私たちの乳児院で働いていました。10年前スペインの王女ソフィア様の訪問で、増改築ができ、100床の施設になりました。20パーセントは捨て子なのですが、不思議なことに、双子、三つ子が多く、場所のない時は小さいベッドに二児を頭と足を交互に寝かせなければならないこともありました。同じ敷地内に養成を受けるために地方から出てきた娘さんたちの宿舎があり、18歳～25歳位までの60名の寄宿者があり、彼女たちは一週間交代で乳児たちの世話を手伝ってくれていました。

私がセネガルについて3日目、イタリア人の若いシスターが寄宿者の食料の買い出しに港に行く折に、日本人がいるから行かないかと誘ってくれ、私も日本語が話せるのでうれしくなって同行しました。港には何隻もの大小の船が停泊していて、はるか遠くの船の上に日本人のような人たちが立っているのを見えました。周りの人たちはみな真っ黒で、私たちは白い修道服なので目立つので向こうもこちらを見ているようでした。その方々が下船したので私は近寄り、「どこからですか？」と尋ねると、「山口県の萩」との答え。驚いたことに「萩」は私の故郷で、しかも話をしているうちに、私が洗礼の代母をした方のお兄様だったので二度びっくり！本当に不思議な出会いでした。

それからは船が入る度に、人が入れるような大きなブリキのタライを2個持参し、大きなマグロ、ブリ、タイ、アジ、サバなどをくださいました。時にはタコやイカもくださることもありましたが、これらはこちらの方々には食べる習慣がないので、最初は気持ち悪がっていましたが、後で味がわかったので、喜んで食べるようになりました。イカは子供の傘くらい大きなもので、厚みも1.5cmくらいでとてもおいしいものでした。ある時しめサバを作ったところ、ポーランド人のシスターは朝食からパンとともに食べ、それで私も。そのうちにお刺身が食べたくなり、食卓に。ところがお醤油がなく、まるで腎臓病食のように酢で、あるいは塩でいただきました。それでもおいしかったのですが、次回にその話をしたところ、早速醤油をくださり、よりおいしくいただくことができました。

私が最初に会った方はその船の船長さんで、後に帰国されましたが、他の乗組員に頼んでくださったので、10年近く私たちの200人世帯を一度も魚を買うことなく養ってくださったことは本当に感謝でした。あるときには、船の底の小さな食堂に招待され、漁師さんとのお食事でしたが、久しぶりに白いご飯とお味噌汁で日本の味を満喫したこともありました。時々、船員さんたちを私たちの食事に招待し、寄宿の娘さんたちのタムタムにあわせて歌ったり踊ったりと、楽しいひと時を過ごしたこともありました。

最初のころは、一人前に働けない私のために神様はこんな形で助けてくださっているのだと、祈りの時には感謝の涙があふれ出ていました。セネガルに滞在する間、船員さんたちとの出会いや、時には不思議な仕方が必要なものを供給してくださる神様の、あわれみ深い摂理に感謝する日々でした。

初めて日本を出る前に、故梶川神父様にご挨拶のため支援する会の事務所を訪れましたが、あれから36年、毎回の「きずな」や日本の素敵なカレンダーなどを送っていただき、「支援する会」の方々には大変お世話になりありがとうございました。これ



からは日本で、私のできることで奉仕を続けたいと思っています。

パキスタン 聖ラファエル病院再建

マリアの宣教者フランシスコ修道会 黒田 小夜子

パキスタン、ファイサラバード市に私たちの修道会 FMM が 1948 年以来経営する 100 床規模の産科病院、助産師学校を併設しているゆかしい「聖ラファエル病院」があります。イスラム教徒の祈りが早朝から夕暮れまで、マイクで市内中轟くパキスタンで、ここ唯一のカトリック病院では、シスター達が沈黙のうちに素朴に人々の医療に従事しています。

私は 2009 年 12 月パキスタンに派遣された時、最初にこの病院を訪れました。パキスタン独立時期にあって避難民に対応しながら発展したこの病院は、ここ 8 年来 FMM シスターの減少に伴い不況となっていました。病院はすさび、患者の減少、入院ベッド 70% の空床 職員の不満などで、このままでは 5 年で閉鎖となると、外部会計監査員から指摘されていました。当面の赤字対策として、他の病院に倣って患者の負担額を上げ“高価な病院”と言われるようになり、貧しい人々は退いていきました。

一年のウルドゥー語習得後、管区長はこの「聖ラファエル病院」をプロジェクトで再建できないかと、私に依頼されました。全く無能を感じましたが、しかしその後もずっとこの事を問いつけました。修道院聖堂に掲げてある FMM 創立者“Mary of the Passion”の画像から、「荒廃していくラファエル病院、再建できる？」という問いかけを感じました。ほかに誰もいないと解かった時「はい」と答えました。尊敬する 2 人の先輩から「あなたは大変な事を引き受けた」と忠告を受けました。確かにそうです。従って即 2012 年 9 月 17 日、私は聖ラファエル病院に着任しました。

その後のプランは神様が教え導いてくださったと思います。私自身としては“祈り、聞く、理解、実行”が課題でしたが、看護助産師、FMM の素人に一任された大きな課題でした。管区長から聖ラファエル病院実態調査には全面的に協力すると約束され、病院改善実行のために必要と思われる病院評議員や医長のタイトルも与えられました。

まず私はパキスタンの少なくとも 10 か所の病院を見学しました。当病院の医療統計簿、会計監査レポート、会議決定記録簿などを調査し、必要であれば現場に赴き、関係者と一緒に実際の問題解明に勤めました。病院の設備、建物は隅々まで 2 か月で極めました。名声のあった最後の FMM ドクターの死後（2006 年）、ドクターの雇用を増加し、分娩はドクターの仕事となり、他の病院同様、帝王切開率の上昇を記録していました。パキスタン新聞の記事（Down 3-12-2013）がありました。「昔は帝王切開が稀であったように、現代では自然分娩は稀。裕福なパキスタン人は自然分娩をしたいため、外国に赴いている」と。

私はまずは常勤医師 7 人とのコンタクトを取ることから始めました。帝王切開術の異常な上昇で手術手当ても含めて医者の方給総額は、全職員 200 人分の総額のほぼ 3 ～ 4 分の 1 に当たり、赤字体制下において医師を増やさないことを決めました。当病院では 医師は全員イスラム教徒、他の職員は全員カトリック教徒です。帝王切開の蔓延にあって助産師は本来の職務から外れてゆき、助産師の学生は自然分娩の症例に事欠くようになりました。着任 3 か月後、私は 聖ラファエル病院の特殊性は段々と失われて行き、経済的危機はむしろミッション危機と理解しました。聖ラファエル病院のミッション、「貧しい人々と連帯し、安全かつ自然分娩を推進する」を病院の正面に大きく掲げました。このビジョン実現への対策としてプロジェク



トを作ることでした。

具体的にはシスター、ドクター、助産師でミッションチームを結成して、自然分娩を推

進していくこと、また、助産師の職務を開発していくことなどを目標にしていきました。さらに、患者を中心に

した視点で分娩室などの改善も行ないました。それに伴いパワーのある大型発電機も必要となりました。

発展するにしたがって、私たちの病院は 2015 年 8 月 16 日に「国家認定聖ラファエル病院」となりました。国から監査に來られ、いくつかの不備を指摘され、新救急車購入をはじめとして、大幅な改善が行われましたし、公式文書、重要文書の保存庫も開設しました。病院の運営も黒字体制になり、安定してきました。

聖ラファエル病院が独自のミッションに目覚め復活できたのは、他でもなく全て心ある世界のカトリックミッションナリー支援組織と、日本大使館からの莫大な支援のお陰です。皆様に心からお礼申し上げ、深く感謝しております。パキスタンと聖ラファエル病院に代って、つたない私から深くお礼を申しあげます。

■ こんにちは！ ■ お久しぶりです!! ■

事務局訪問の宣教者

4 月 11 日 ————— ブラジル

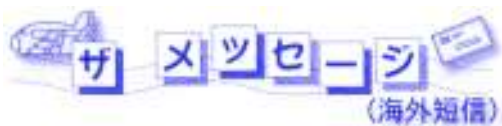


大阪聖ヨゼフ宣教修道女会

Sr. 平田小百合

いつも「きずな」を楽しんで拝見していました。私たちの修道会が、ブラジルで宣教

を開始して今年で 25 年になる節目の年、物心両面で支えてくださっている方々に直接お礼を言いたくて、初めて事務所をお訪ねしました。世界中に散らばっている宣教者を結び合わせ、支え続けてくださる「支援する会」の皆様から感謝いたします。



* ベルー サンタクルス サレジオ・シスターズ 漢那 和子

主のご復活おめでとうございます。私たちを愛されたキリストが、世界に平和を、私たちに真の回心の恵みが与えられますように。いつも暖かいご配慮ありがとうございます。皆さまの上に復活されたキリストの恵みが豊かに注がれ

ますように。一つの心をわけあいつつ。

* ブラジル サンパウロ イエスのカリタス修道女会

ブラジル準管区長 アルジラ 中島シズミ

イエスのカリタス修道会のブラジル宣教 50 年と日伯司牧教会創立 50 周年を記念して、感謝のミサを捧げます。

日時：2017 年 6 月 11 日 9：00

所：ブラジル サンパウロ・カテドラル

主司式：ジュリオ赤嶺大司教 パニブ司祭 他



★テレビ番組『こんな所に日本人』の中で、アフリカ・シエラレオネのルンサ村からシスターの活動の様子が報告されていました。その方はシスター吉田富美子で、内戦で疲弊し、エボラ熱が蔓延する中でも退かず、ご自分の命を賭けて子供たちに寄り添う生き方は、真の宣教者の姿と思い、感動いたしました。

(東京都青梅市 鳥居孝一)

★派遣された皆様が、その国の状況に応じた宣教ができますようお祈りしています。

(鹿児島県徳之島町 春日圭子)

★遠い異国の地に在って、神様の愛のためのご活動に心から感謝申し上げます。

(東京都世田谷区 森井朝子)

★職場（カトリックの幼稚園）で「きずな」を拝読しておりました。個人会員として送金させていただきます。（青森県青森市 鈴木裕子）

◆「きずな」によせて◆

恐れないひとびと

東京・成城教会信徒 北村文代

「きずな」は、私にとって、少々やっかいなレターだ。まア、こんなものだろうというささやかな日常のラチを、広げようとする。私の毎日——朝起きて、顔を洗うような習慣で行われる神への祈り、それも大抵5分以内。それ以外は、エゴの力満載で、一日を過ごす。そのパターン化され、疲労し、不安と恐れを積み上げる日々の思考に、ポチャリとさりげない意志を投げかけるのが、この「きずな」である。

テレビ番組『こんなところに日本人が』顔負けの地域から発信される宣教師たちの言葉は力強く、客観的で、それでいてユーモアに満ちている。彼女たちの直球が心の奥に、ズシリと響く。そして同じ人間として、どうして彼女たちはそれを行ない、私はそれができないのか、と考えはじめる。私はもうシルバーエイジだから、と年を口実にする。だがそれはすぐに否定される。なんと七十歳、八十歳の、もと若人が、現役で働いている。

私は病を得ているから、と医師の診断書を印籠のように差し出す。しかしこれも口実にならない。ブラジルのアマゾン流域で働く同級生のシスターは、確か宿痼（持病）をもち、腰痛は手術をしてもおさまらない。糖尿病も危険水域だった。だけどブラジルには喜々として飛んで帰っていく。その地域は、相当治安も悪いそうで、家の修繕をしてくれた建築士が、帰路に銃殺された。

「恐くないの？」と聞くと、「全然」と答える。「大丈夫、神様がいつも一緒にいてくれるから」。

経済的問題も、役所の交渉も、真剣に神に祈り、まかせると必ずうまくいくという。この姿勢は十代の頃から変わらない。数学の追試で、これが赤点なら卒業延期という自体でも、同じせりふで乗り切った。彼女に限らず、宣教師たちは全く、恐れというものを知らない新種の人たちだ。

エボラ出血熱全盛時代のシエラレオネのシスターからの報告も、冷静かつ明るかった。その

文面から、恐れや不安の影を感じることはなかった。彼女たちはなぜ恐れないか？

「マインドフルネス瞑想」の提唱者は、「聖霊はマインドフルネス」という。過去に思い煩わず、未来に不安を覚え、現在に意識を集中すると、恐れがなくなり、聖霊に満たされるのだろう。

彼女たちは、どんな地で、どんな状況にあっても、マインドフルネスであり、聖霊に満たされているのだ。だから恐れないのだ。ここが私との違いだ。彼女たちのメッセージを読んで、私もマインドフルネスになり、聖霊に満たされる生き方をしたい、という願いにかられる。

本当に「きずな」はやっかいなニュースレターだ!!

新入会員 (敬称略)

個人会員 8名

高橋 泉 (東京都世田谷区)

藤田 睦 (東京都目黒区)

松島かおる (大阪府枚方市)

大野 喜義 (東京都北区)

伊藤 千秋 (神奈川県横浜市)

新井 孝利 (東京都多摩市)

鈴木 裕子 (青森県青森市)

広田 恵子 (埼玉県新座市)

ロンドリーナからの訃報

ブラジル・ロンドリーナで宣教活動 38 年の信徒宣教者 中川佳子様が 2017 年 3 月 31 日 83 歳にて帰天されました。妹様からお知らせがありました。お祈りください。

事務局からのお願い

- * たくさんの方のご協力にいつも感謝しています。
- * 9 月 23 日 (土) に「宣教者のお話を聞く会」をニコラバレ 9 階ホールにて開催します。
どうぞ今からご予約ください、詳細は 9 月の「きずな」に掲載予定。
- * 引き続き、未使用の切手や書き損じのはがきをお送りください。領収書のはがき、宣教者への通信費として有難く使用させていただきます。

発行：日本カトリック海外宣教者を支援する会

会長 M. マタタ

〒106-0032 東京都港区六本木 4-2-39

Tel. 03-5770-8753 Fax. 03-5770-8754

e-mail kaigai-senkyo@cronos.ocn.ne.jp URL <http://www.kaigai-senkyo.jp>

・銀行振替口座 みずほ銀行高田馬場支店 普通 2084112

日本カトリック海外宣教者を支援する会

・郵便振替口座 00140-5-67881 海外宣教者を支援する会